

繪本漢楚軍談

二編

二

13

3565

12

20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 30 1 2 3 4 5 6 7 8 9 40 1 2 3 4 5 6

早稻田大學圖書館
昭和34.6.3 雙
藏書

東武鵠鵠負高纂述

韓信於陳倉道會辛奇

不題前話却説亦門吏の韓信が兩日も回來さざれば急ぎ范増の
 許ふ走行備説ふ告てらひける。偕も一月程前日ふ一個の士が夜
 晩てより韓信の宅ふ訪来で終夜語説ると及聞ゆに其後
 韓信の單身家僮も行李も捨置て匹馬ふうち跨り友人と訪る
 とそ出行く。兩三日過ても歸來ざる心變りて若他郷へ逃走行
 くふあらずと敢て報知する。とばり范増大いお怒りて跣脚
 走つ嘆息つき。五呂平常より這人を懸念おひしが果して渠を
 逃るより。前曾項王へ叮嚀ふ韓信を重く用ひしを人若不然の

早く殺して後の患を除き玉と諫せし言を其儘ふ不被
しと悔いけり今日此人を走らして御方の大患這他を決
定て夜中へ去たるらん吾胸中不意も大病を發しとて
周章騒ぎて早速追跡の士卒を令し若追得來ざることを
吾意晝夜とも不安堵隱ひあそべ急迫々と捕人をまかせ
跟を巡らし内ふ入て隨即項羽を奏し項羽の聴て眼を睨
て那懦夫めが我と背きて漢へ歸しか憎むべしと怒るを止め
范増が曰韓信の極めて識見ある的確然るこそ前日より老
臣が屢次這人を用ひ玉と薦奉りぬと吾君用ひぬめど今
他方へ走しと後日の患ひをいせん云ふ項羽の沈吟とて然
り彼れ吾構へ關所を通るふ文憑る斯ま關所の番兵が

決然容易に通さずと攔阻てあるらん急ぎ鐘離昧を差せと
部下の拊拍て二百名の輕騎を救ふ鐘離昧の領るまで快く捉
來るべし渠が屍どうち碎き萬段あると捨んむと烈しく警告を傳
へる話説鐘離昧の命に依て安平關まで追趕する番卒も
呼出して韓信の奈何と問は四日以前此關を越るきと答はめ
鐘離昧の發したるを關上官兵と責罵り關を出て遇去の如
く輕々しく通したるを叱り懲せ關總官が稟道する前韓信の
三秦と會約を為さば御使を緊急の公事なりと実言しやう
告らるれば意外も通しし將是目今ごろの漢の境ありや行
らん先三秦へ報せ急く追うけ玉へ既先日棧道を燒絶
たれば漢の地へ韓信廻るべしなうふ入りからん有然る追

付ん更難かるまど。といふ鐘離昧現もと同トて直さる能く
秦の傳報又追趕の兵卒を遣して自今威陽のまわり前段
の事と隨即項羽の告申せしむ。項羽の然るに推念もせむ。既
遠く逃去るも然るに懦夫が何る大事と可成得と。其
ふち捨ち。唯彼彭城の吏と急ぎ。只管小令と傳文武大小官
員と隨て那地へ赴き威陽の呂臣擬公を留めて固く守らしむ。
且説韓信の安平関を離るより。一路の褒中を走り程の復
散関といふ所に至り。前の如く批を驗し。此関をも難く過て二谷の
路口に到る。情と思ふ。此處こそ是緊要の地方なり。前日
張良が贈与し。地理図と採出亦土地の形勢を觀看す。今此
路口に疑ひる。とうち領たつ地図を収めて馬の策んとする時。

只見れ東の方より。一騎の軍士真先小走来。四五個の士
卒を令して。韓信の中を取囲め。將軍の姓名は何ぞ。唱る。亦
何の公幹あり。此地へ来られ。やと問ふ其意を既小察し。韓信
隨即答て曰。我姓は李氏なり。當今褒中へ赴きて親族を採
と思ひ此地まで来たり。何の名姓を問ふ。と問復さる。彼
軍士の否別義ある。批文あり。視せらる。と云ふ。韓信懷
より。一紙を採出。うち開くと。兵士の近く進み。手を取て看
ける。程もあらず。韓信の背に帶る寶劍を抜手も不為看
一劍小兵頭を殺死しける。這ハ説事遅く。其所為速く。唯目
撃の間に察す。那時五個の士卒等が。就く韓信の討てか。と
韓信のいふとも不為手小寶劍を奉ると。視ま。五個の軍卒

忽地不前後左右不殺倒。斯て四邊人あけき。韓信ハ又馬
不策打西小向ひて走行けり。

評ハ曰韓信ハ楚不背ける怪ハむ不足其トめ不彼ハ智能

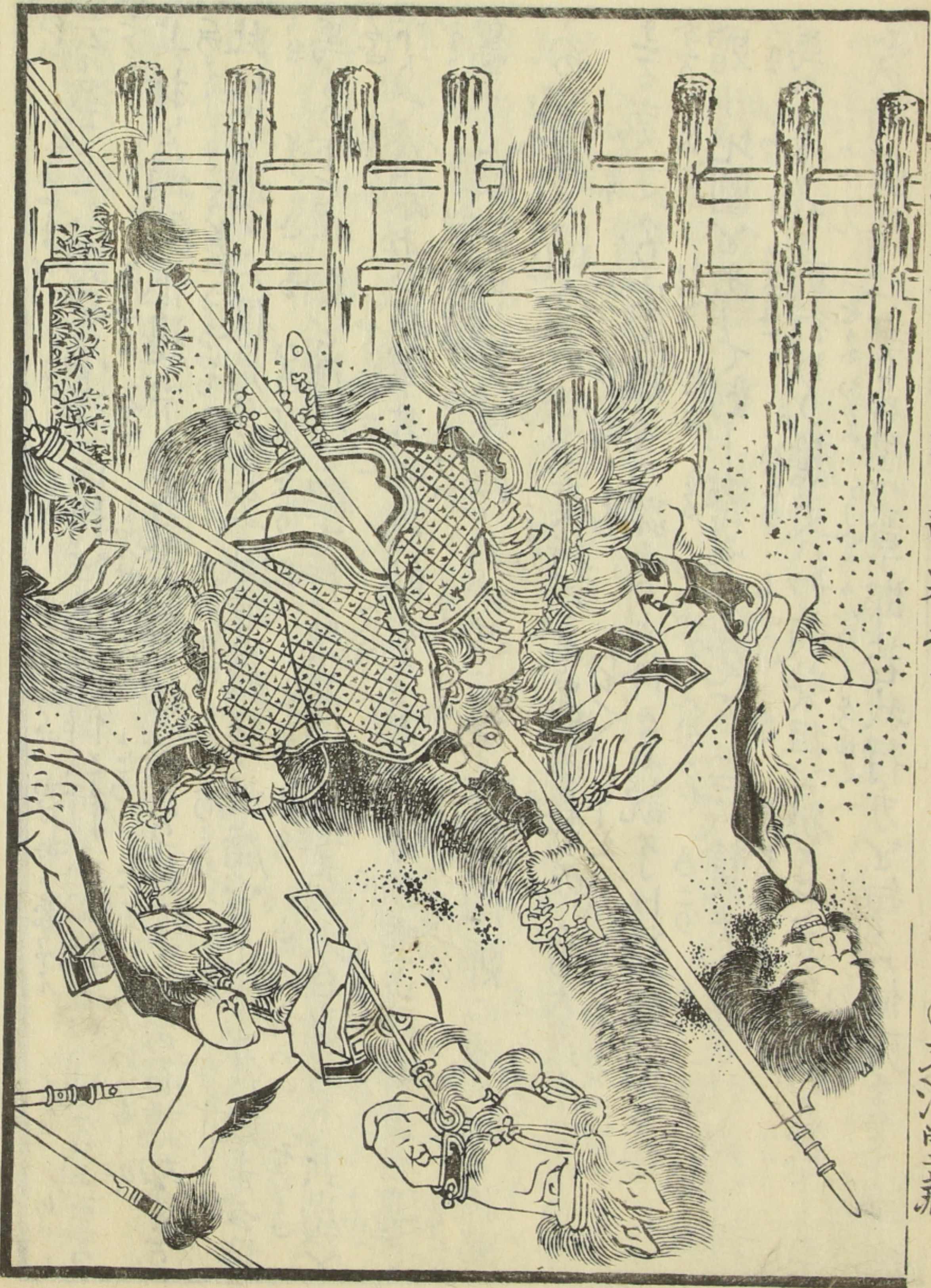
とめて楚不あふひを怪ハむべし。

斯て韓信ハ山口の小僻路と西南の方走りける。兩邊都是大山。中
間ハ止一箇の路。添ハ流ハ從ひて行程ハ右も左も断岸高く。
十分險峻とあらる。馬ハ乗て進ミ難ク。只得馬より下テ響を着て。
一歩歩ハ緩ハ行ども。是此僻路ハ何處ハ行とも。未知る。やうやうハ
正在猶豫思ハ時ハ但看ミ。向前の山坡より一個の樵夫の轉過来ハ
會ハレハ韓信ハ是幸ハと近づく。小聲トけて何の條の徑ト往ハ陳
倉道ハ到ラヤ。と問寄ハ那樵夫ハ挑テ柴担ハ放下。用手指着ヘク

云々。這山路を此去て山崗と遠過傳ハ行ハ小松林との地名ハ至る。
其林ハ過ぎ低邊下リて乱石灘といふ所あり。其地ハ一箇の石橋架ミ。
此橋ハ過リハ便是名ハ小蛾眉山嶺なり。此嶺ハ上リハ甚難走ル。
馬より下テ手綱ハ捧心ト配テ行ハ其地ハ過ミハ太白嶺なり。其嶺ハ
下リて人家あり。將軍其里メ飯吃ル。夫より孤雲山兩脚山を過テ
墨水といハ河を渡テ寒溪といハ谷を過リハ則南鄭の地ハ到ル。將軍
この路上ハ過ルハ必ズ夜行を要ス。ある昼といハも大寒出て人を害
ス。更ヌル。実ハ難美の路なり。と件々ハ説テければ韓信ハ張良ハ
贈ハ地圖ト出テ對ハ察ハ分毫不差ハ樵夫ハ厚ク礼謝ハ演
馬ハ策ウハ前行けり。樵夫ハ如前柴担ハ挑テ正ハ山坡を欲下トス。
その時韓信ハ肚裏尋思ハ章邯若我行方ヲ知ルハ何所ヲ追迫

繪本漢書卷之三

文淵堂



三岔の路口ふ韓信
楚の軍士を斬る

繪本漢書卷之三

五

作^ア筆研を借得て倚^アる。白粉壁牆を題^アける。

陟彼山路難 崎嶇不可側 藤蘿結層密
 狐兔藏幽黑 怪哉此山險 峻坂有萬億
 去天手可攀 迴轉苦勦力 迷黠竟何往
 無由問鄉識 忽見採樵人 問我將焉適
 勒馬立山前 廼云西川國 樵人指要路
 按圖無差忒 足知爲忠亮 孔曰宜報德
 楚兵恐忽至 受擒反自賊 斬汝絕踪跡
 實非我薄刻 留汝特山樊 存我爲帝甥
 我當萬丈望 君當萬丈望 君死良不惑
 無罪遭霜鋒 我心爲君惻 君德終回報

君後我更植 蒼蒼秋月明 疑照君顏色

韓信^{かんしん}此歌^{このうた}一篇^{いつぺん}を祿^{ろく}畢^ひける時^{とき}後^{のち}邊^へより一個^{いっごう}の壯士^{そうし}走出^{でしで}來^き韓信^{かんしん}の
 對面^{たいめん}揖^{いさむ}もる。你^{なんぢ}今^{いま}楚^その背^{そむ}きを漢^{かん}の歸^{かへ}行^{ゆく}路^{みち}上^{うへ}で無罪^{むざい}樵^{せう}夫^ふを
 酷^こく殺^{ころ}す。却^{しか}て我家^{わがや}未^まで憚^{はか}る詩^{うた}と賦^ふを記^しす。酷^こ大膽^{だいだん}なり。
 我^{われ}目^め今^{いま}你^{なんぢ}と攀^か住^ずて楚^そ王^{おう}の許^{もと}へ送^{おく}る重賞^{じゆうかう}の望^{のぞ}みを伺^{うかが}ふ。
 驚^{おどろ}愕^{おどろ}韓信^{かんしん}の疾^{はや}立^た起^たる情^{なさけ}と先^{まづ}の壯士^{そうし}の面^{おもて}相^{あひ}を視^みて速^{はや}く心^{こころ}相^{あひ}
 と量^{はかり}知^しれ阿容^{あよう}る色^{いろ}を云^いける。你^{なんぢ}も亦^{また}我^{われ}と同^{おな}く。良王^{りやうおう}と冀^{あこ}ふ
 て漢^{かん}の歸^{かへ}路^{みち}に俱^{とも}に夜^よ中^{ちゆう}に到^{いた}る。と倒^{たふ}説^{せつ}這^こ話^わへ那^{あの}壯士^{そうし}大^{だい}いふ
 笑^{わら}ひ忽^{たち}ち在地^{ちの}拜^ひ伏^{ふく}して道^{みち}を。俺^{おれ}祖^そ乃^なち周^{しゆう}の臣^{しん}下^かで姓^{せい}の辛^{かん}名^なを
 雷^{らい}と申^{まを}者^{もの}ゆゑに世^よ々^{ささ}扶^{たす}風^{ふう}の地^ちに居^ゐる。我^{われ}父^{ちち}の辛^{かん}金^{きん}の秦^{しん}の始^は皇^{わう}の
 殘^{ざん}暴^{ぼう}るを恐^{おそ}る。遂^{つい}に家^やを親^{おや}に。此^{この}太^{たい}白^{はく}嶺^{りやう}に到^{いた}る。酒^{さけ}を賣^うる世^よ

活と致せり。某が名い辛奇と呼れて少年より家産を修め専攻
猶と好む力量と勵む兩武藝を熟しれども一向未明主遇せ此
故に唯放心と月日と過しゆく。前夜不思議の夢を看り開
則飛虎が東北の高嶺を越て来り草蓬の上臥てる。嚴然
たる威あるが如く見る。曉に覺てより思惟る。今日必は英雄の俺
屋の邊と經過のふ哀れや在らんと判り得れば今朝よりと採獵
も不出半日餘り等う。果して貴客那嶺を越て俺の草
店へ光臨あるを視る。瑞夢の賢公は是るべし。と壁裡より
窺ひ既將軍と識といふ。言の依えるは終に適来る過言
の尊意と冒瀆。奉りぬ望をい小的が罪を恕しと詫る
も韓信急む杖起し。辛奇ふ答禮してのみ。壯士の必は一表

堂々と知る。殊に其意明主の會て忠烈の義を現るべし情
願ありとを察せり。今漢の主沛公は寛仁ゆて大度なり。あの故に
天下の豪傑と招納用ありと鹿る。と聽えり。何ぞ心を傾け
逸早く此人に投ひ節と建督力を盡して諸侯公卿も封せられ
勲功を圖りぬ。疾々仕へて可憐。祖先の家譜とも不失
よ。とて辛奇は其の大喜び某も亦幼稚より家名を興立とゆふ
久矣賢公以来沛公に相見ぬ。決然。此上るは貴顯とあ
まべ。量推ふ那時に許の兵士と統我を楚を討んととを為
らるる。然ある。暗に此路より軍兵を押し玉へ僻路れども
且近きて三秦の兵も是を得る。知らね。漢の軍士が從何より
出べし。思量して防兵もあらず。と未然と説きて再度駭く韓信は

且感^{くろ}。且喜^あひて辛奇^あの^てを握^とり此一言太^{この}秘^まま^をき^い。一大事^{おほい}る^べ。輕^{かろ}く
あ^よ。他人^よの^も泄^とう^もの^ま支^しる^もと。懇^ねふ^ふ諭^さし^と。我^{われ}若^{なり}他^た日^ひ楚^そを伐^うの^も軍^{ぐん}兵^{へい}
を卒^ひて^き来^きり^る。足^あ下^さ必^{かな}ず^も我^{われ}勢^{せい}に^も随^{したが}ひ^て。郷^{きやう}導^{どう}と^も奇^き功^{こう}と^も建^たよ^も。実^{じつ}に
云^い。秦^{しん}智^ちあり^とい^ふも^も。此^{この}間^ま道^{みち}を^へ経^へて^ふ。不^ふ意^いと^も討^うて^い。即^{すなは}時^{とき}に^も敗^くれ^しま^す。と
語^{かた}ま^に。辛^{しん}奇^きの^まく^く。然^{しか}び^に。頼^{らい}母^ぼし^と。後^{あと}堂^{どう}伴^{ばん}の^も酒^{しゆ}般^{ぱん}と^も更^{さら}に^も母^{はは}と
妻^{つま}と^も呼^よび^て。韓^{かん}信^{しん}と^も拜^{はい}せ^し。厚^{あつ}く^も。饗^け忘^{わう}し^と。遂^{すなは}に^も相^あ結^{けつ}ふ^も。兄^{けい}弟^{てい}の^も約^{やく}誓^{ちか}を
る^も。如^{かく}右^て而^て次^{つぎ}の^も日^ひ。韓^{かん}信^{しん}の^も天^{てん}未^み明^{めい}に^も起^お出^でつ^も。拜^{はい}辞^じを^も演^{えん}て^ふ。便^{べん}要^{よう}起^お身^みと^も
その^も時^{とき}辛^{しん}奇^き進^{しん}て^ふ。是^{こゝ}より^も前^{まへ}邊^への^も名^なの^も肩^{かた}。孤^こ雲^{うん}山^{さん}而^て脚^{あし}山^{さん}あり^と。
言語^{げんご}に^も絶^たる^も。大^{だい}難^{なん}所^{しよ}を^も徧^{へん}徑^{けい}に^も些^さの^も兩^{りやう}足^{そく}を^も歩^あ行^{かう}の^も險^{けん}阻^そ多^{おほ}し^と。且^{また}
亦^{また}猛^{まう}大^{だい}鬼^き異^い獸^{じゆ}野^やに^も在^あり^と。仲^{なつ}木^{ぼく}密^{みつ}生^{せい}溪^{せき}間^{かん}に^も伏^ふ住^{ぢゆう}に^も尊^{そん}兄^{けい}孤^こ身^み
へ^も行^{かう}難^{なん}か^らん^も。小^{せう}弟^{てい}の^も器^き械^け預^よめ^も。備^びう^も。これ^も従^{したが}ひ^て。寒^{かん}溪^{せき}を^も経^へぎ^も南^{なん}鄭^{てい}

まで送り申さんその為前夜より母も乙妻も告て支度せり否
で相伴ひあり。とふ韓信拜謝して。連ととそれとも不肯長鎧一
條も弓箭をのみ奴も。腰刀を帶うて先立立。韓信のその好意を感
家族も一個々々礼を演て馬の蹄で辛奇と共に孤雲山を志して。行
一路も兩個士の兵法を説武藝と論下。兩路過了漸に寒溪を
来到ける。這里で袂と分つべと。辛奇の叮嚀。韓信(南鄭の方
と用手指道。馳て其頭の酒店に立倚共。幾杯の酒飯を。とて
尚再會と堅く約し。東西へを離行去ぬ。
必竟此後の話柄の如何る。次々の巻と紐解て。い。益佳境
小入の全説を看玉ふべし。

第廿二回 韓信於招賢館論機變

再說韓信一壯士別れて獨行隨意馬策うち急死々己南鄭の境入りて先其地の形勢と人物の風俗彼是心をつけて視察れば正に是當世廢乱せる咸陽豊城えとの体た似む國王の有徳仁恕自然民の風とるけん諸國の人氣と引替で晩年子の安閑として道路も寛々歩行青年の猗々として職業を勵身と壯健の奔走とれども往來の路と讓て合て互に争ふ事もある然る路も落有東西と不拾笙歌の音声の處處に聞えて太平の旨趣を告るが如く千門萬戸の快く樂む休現然る田野の廣く開けて土肥桑の林麻の曠能生茂と都て是國產の物豊富富貴也又城中の体と窺視も六街三市何事も賑ひ繁昌しく貴賤の群集透間もあつた又衣冠の正しく服色の質朴る上下の差別よく調ひ文物風

景奇絶めて一望二百里の間平川渺々と流る南方ある劔門の固めありて中路の棧道の別み險しき切所あり是を此世の蜀の棧道なり前張良が燒落さず亦曰前六路の往來と通し後大江に據て則荆州襄陽の襟喉と押へ守る三秦の固め隴西の要害民物康阜めて國人常口癖の如く甲乙も云支るりとして人の言を傳へ聽み春の碧桃紅杏夏の蓮藕秋の東籬の菊綻ひ西風吹けば滿地の金々々南嶺の白梅開け雪の清香と含むが如く美酒嘉魚香橙晚稻の土産ありて名所古跡の絶景あり石頂関瀑布泉盤雲塢天漢樓柱石堂四照亭娥眉山青城山錦屏山岷山赤甲白鹽の勝地と讚誇する韓信其豊饒るを視つ聞つて心小感し猶進を衙門を認め

前招賢館賢人を招くと額を掛兩邊の榜を立て十二箇條の支と記し。國中の人民等とく。他方の旅客に至るまで宜く悉く相觸て知しむべし。と有けし。韓信イ止て先是と讀其箇條曰。

童子解

- 一 熟曉兵法深知韜畧可爲元戎者六韜三畧を能弁する軍師の吏なり
- 一 驍勇過人斬將搃旗可爲先鋒者先鋒の大將なり
- 一 武藝出衆才堪驅使可爲散騎者武藝の備を察する物見使番なり
- 一 諳曉天文善占風候可爲覲畫者天文を見て味方の吉凶を占ふ易術の達人なり
- 一 素知地理深通險易可爲鄉導者諸方の地理をよく知る案内者なり
- 一 心術公平爲人正直可掌記錄者心術の公平なる公事司なり
- 一 變機精明動能料事可爲議軍情者變機の精明なる料事官なり

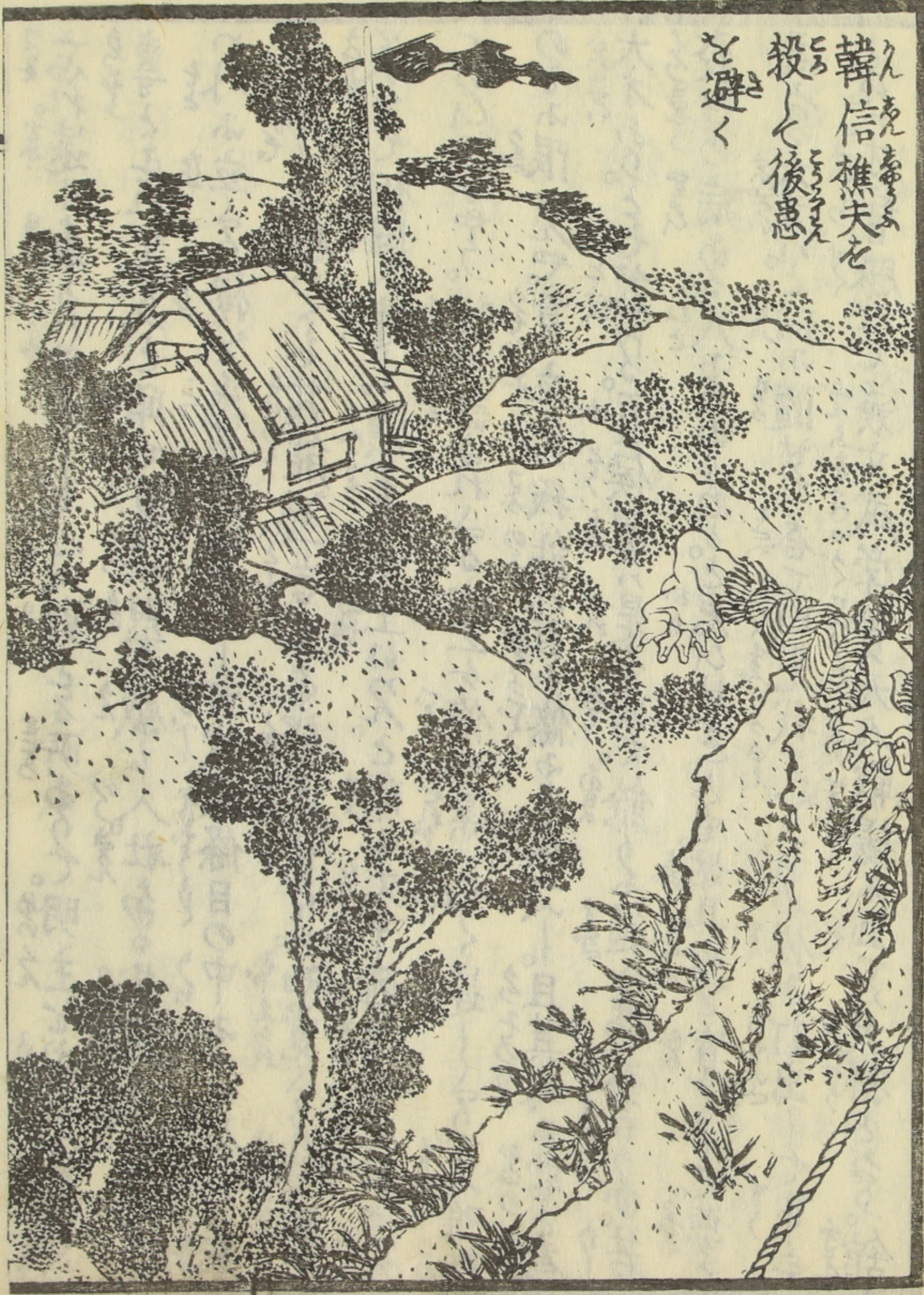
- 一 言語利便足能動人可爲說客者言語の利便なる人を動かす能はる者なり
- 一 精通算法毫釐不差可爲掌書記者算術の精通なる毫釐の差を容れずる書記官なり
- 一 多讀詩書以備顧問可爲博士者詩書の多讀なるを顧問に備へる博士官なり
- 一 素明盤學神聖功巧可爲國手者盤學の素明なる神聖の功巧なる國手官なり
- 一 善能馳驟探聽機密可爲細作者馳驟の善能なる探聽の機密なる細作者なり
- 一 掌管錢糧出納有經足可以給軍餽者錢糧の掌管なる出納の有經なる軍餽の給ふ者なり
- 一 凡人于十三件中內曉一件者即赴招賢館報名聽候考驗果稱其實奏請重用立賢無方不拘貴賤盡心王事務期報效懋著功績不次超擢封侯一拜相悉有此舉敬茲告示

と記し有れば。韓信の這と讀みて心小喜び其邊近づき来
たる者小向ひ當時公聽へ賢人を招き薦むる吏を主る何と
人ぞと問ふ其者答て然る賢人とやんと招き納る官公
則滕公夏侯嬰なりと。韓信これをうち受て心の中思ふ
我今蕭何の相見て往日時候張良が授ける割符を出して用ひ
らまへ容易けきとも斯て凡人の仕官さる等うして更
大夫の趣意あり。先夏侯嬰の對面して我胸中の才と頭と
相蕭何とも説伏して。諸漢王の見て後件の割符を出し我
碌々として他人の薦め依り事とする如きの小人非ざるを知ら
古人も既云る吏あり。難進易退と若容易進るる重く
用ひらまへと。心中思決定め先名字書札を記して夏侯嬰に

官家ふ到て執奏と以て名書を出し。某の遠方より情願ありて
参りて相見と乞はつと申す家童の内に入りて。這と夏侯嬰に
告し程夏侯嬰女の名書を見て此人の曾てより聞及びぬる者なりと
いひ出て對面せり。其人物の常るぬを見て此者今楚を反
き遠く險難の地ふ来る必き深き故あらんと思ひ先初對面會
沢濟て偕りて。壯士何等の事ありて。這僻陋へ来らるると問
ふ韓信の些なりも憚る面色をく申ける某は是楚の臣なり。然れ
ども項王用ひざる故に暗きを棄て明るるに従んと咸陽より遙々
来りひひぬ夏侯嬰の是を棧道に焼絶て山路の甚險しく進
退とも易くざる。壯士の何もの路よりと。湘水来らるると再
問ふ韓信の從容と答て曰。藤を攀葛を手操引辛勞とら



韓信樵夫を
殺す後患
と避く



忘れ遠く来る必しも心期する所ありて。明主と求めん支と。六
專とさればなり。と聞て夏侯嬰の感入仕ある哉其志節。卿邊
外小立する榜と。悉皆認められ可成彼條目の中ありて。何の業
あり秀る。願わく其能と一言せても説示さる。知覚する其藝術を
承やと相国に達し。漢王に申上りんと。聞ゆ不す韓信の亮尔と。突
てひけるや。榜に記されたる十二條の某悉く達し。又唯此
のその限らや。算立るや我能の百々條も及ぶべし。且其外の要と爲
大才あり。とを答ける。夏侯嬰は是を聞て。餘り不過は。大言うの若
發狂の病ある人なりある。と思ひけり。姑且心を寛くして。要と
爲る大才へと。向ふ隨せて。答て曰。先我才と有の。俟ふ。打出して申さ
と。たの才智勝れて。兼文武学貫天人。戰場に出て。大將とる。館

ふ入て丞相とあり。坐らふ中原と鎮めて。百度幾は。百度勝ち。天下
と平定し。掌と反さる如く。破楚の大元帥とる。世と漢に歸せしめ
ん。我我方寸の胸中あり。若其仔細を明ふ。聞んとる。下深理
と説て。聽え申さん。榜に記さる。箇條の如き。僅に一節の能ふ。未
て。某が心より視る。最細事なれば。徴さふ足ら。此とて不取の
と。倘若無人の云放て。夏侯嬰は愕然と呆る。支半刻なり。韓信
の面と看留し。復其度量と。信むると。其尊むべく。其大言と疑ふ
と。これ更ふ狂人の對するが如し。然るを以て夏侯嬰の暫時心迷ひ。復
復その胸の中せし。金言もあり。と覺る。改めて上座に迎へ。再拜
あて申ける。我素より先生の大名の傳聞。今も未知其面。今此
地に來臨し。公私の幸い。の不在。実天下社稷の大幸なり。と云。

軀て酒食と供へり。且旅中の疲勞をさる。猶その本意を窺ん
と思ひつけば。韓信の對ひ貴客願ふ。此金玉の論と聞けり。玉へ
久し。韓信の猶豫もせむ。卒然として申す。然世の大將たる者。徒
兵法を知りても。能兵を用ひる。莫不能。これ其才の不足なる。縱令孫
と讀誦め。韜略を諳し。うとも。臨機應變の即智る。んば。由兵書と
不知兒の同うして。取ふ不足。必や兵法を知て。且善兵を自由自在に用
ひ。大人を良將とせん。昔宋国の寒氣。逢て手の龜。さる方。蔡を
畜て用ひる者あり。升が家の川。岸辺。せせ。家職。絹と洗ひ布と。洒
ちて生活し。寒中。雪霜。ひふも更なり。氷を碎きて。水。入。絹布を
洗濯。と。敢て手足。龜ら。其。蔡の製法。を深く秘して。他人。あ
せ。或時。此家。客あり。百兩の銀を。出。件の。蔡の一方。を習

んと。懇望けり。家の親族。相議。を。終日。絹と洗ふ。ても。價を
取。此。今。百兩の銀を。得。後。斯る。業。とせむ。他
勝。家職。も。出。て。宜。か。へ。手。足。の。冷。龜。も。蔡
の法。を授けり。彼客。其。妙法。を傳へ。受て。後。吳の國へ。赴
し。時。越王。軍兵。を興。未。吳の國。と。攻。天氣。甚。寒。けれ
吳の勢。悉く。手。龜。で。防。戦。と。能。殊。吳の兵。も。小。勢。なり。同
寒。氣。の中。も。越。此。節。大。軍。あ。れば。陽。氣。盛。ん。の。勢。ひ。あ
折。彼。藥。方。を。知。客。隨。即。不。龜。の。藥。を。製。て。吳王。に。奏
是。を。分。ち。て。悉。比。皆。塗。ひ。吳の軍兵。も。寒。氣。を。忘。少。一
手。足。の。不。龜。も。働。き。常。十。倍。て。越。の。大。軍。を。此。も。怕。唯
戦。打破。で。這。大。功。を。立。百。兩。の。傳。方。立。地。も。萬。金。の。賞。と

あり。彼客は呉国の為なり。重んぜらるゝに至る。絹布と洗ひたるも、
 亦大敵を破るゝも。同ト不龜手の藥するも。其用る所雲泥と
 違ひ。故と察し。是を大將の心得なり。と演る。と聽夏
 侯嬰亦難し。と曰。御邊當今如此。大才と懐き。已久し。楚
 小仕へて。重く用ひらるゝ。何故ぞ。韓信が曰。昔百里奚が虞小在
 了。時這を用ひる。支能はされば。虞は了。亡び。秦國小至りて。之
 克用ひらるゝ。多小奚が才智も現して。秦は則覇王とるれり。
 賢人才子の才機を展るも。亦大功と建ゆ。唯その君の用ゆゆと。
 用ひらるゝと據るもの。其も楚小在る。日屢計を申せ。と。良
 策奇計を弁ト得。用ひる器量不有。我亦亦展る。小無由
 免て。項王用ひる。支の能。と知る。故。楚を棄て。漢小歸し。

社稷の與小功名と立んと欲し。と未だ。と云。と。夏侯嬰ハ
 既小感伏の心あり。猶其才の深源を。尋問。と。膝を拭ぬ。御
 邊楚國小在。と。遂小用ひらるゝ。依て。未大才と顯さ。と。余ハ
 今漢王小仕へて。幸ひ。好用ひらるゝ。如何。功と。立ら。と。云。
 且。亦答る。やう。漢王若。韓信を用ひる。何。あり。唯此巴蜀の
 兵士を統し。正し。仁義の師と起し。東小向ひて。進伐せん。先王秦
 を取て。雄威を示し。次小六國と降し。と。躬方と。項王の羽翼と。去除て。
 尚籌策を逞。と。范増と。困まり。幾小數月。と。成。
 陽と。定め。支。俺が掌の中。あり。只恐ら。足下。其を。薦舉る。支。
 不能。漢王も亦。惑を。含。りて。用ひる。事。能。と。餘。小烈。と。説。け。
 ら。夏侯嬰の疑念を生。と。稍。あり。又云。御邊の大言。悉く。理。

當ての聞ゆとも。其実学するより夏を恐る。項王一声奉て叱る。萬人皆魂を失ひ天下縦横して。諸人恐る夏己の三年。武勇古今秀より然るを今是敵者一人のる。小御邊の容易ける言と出て彼を侮て云秦と武の數とせむ。六国と廢人の如く輕し。軍師范増を困りぬる。餘の過なる乱言。是只自ら尊大所の空言。在る。歟。覺束なり。とを難しける。

實ふ夏侯嬰も漢の名臣なり。韓信の英才も臆せむ。能難論して其虚実を視察する事感ふべし。

第廿三回

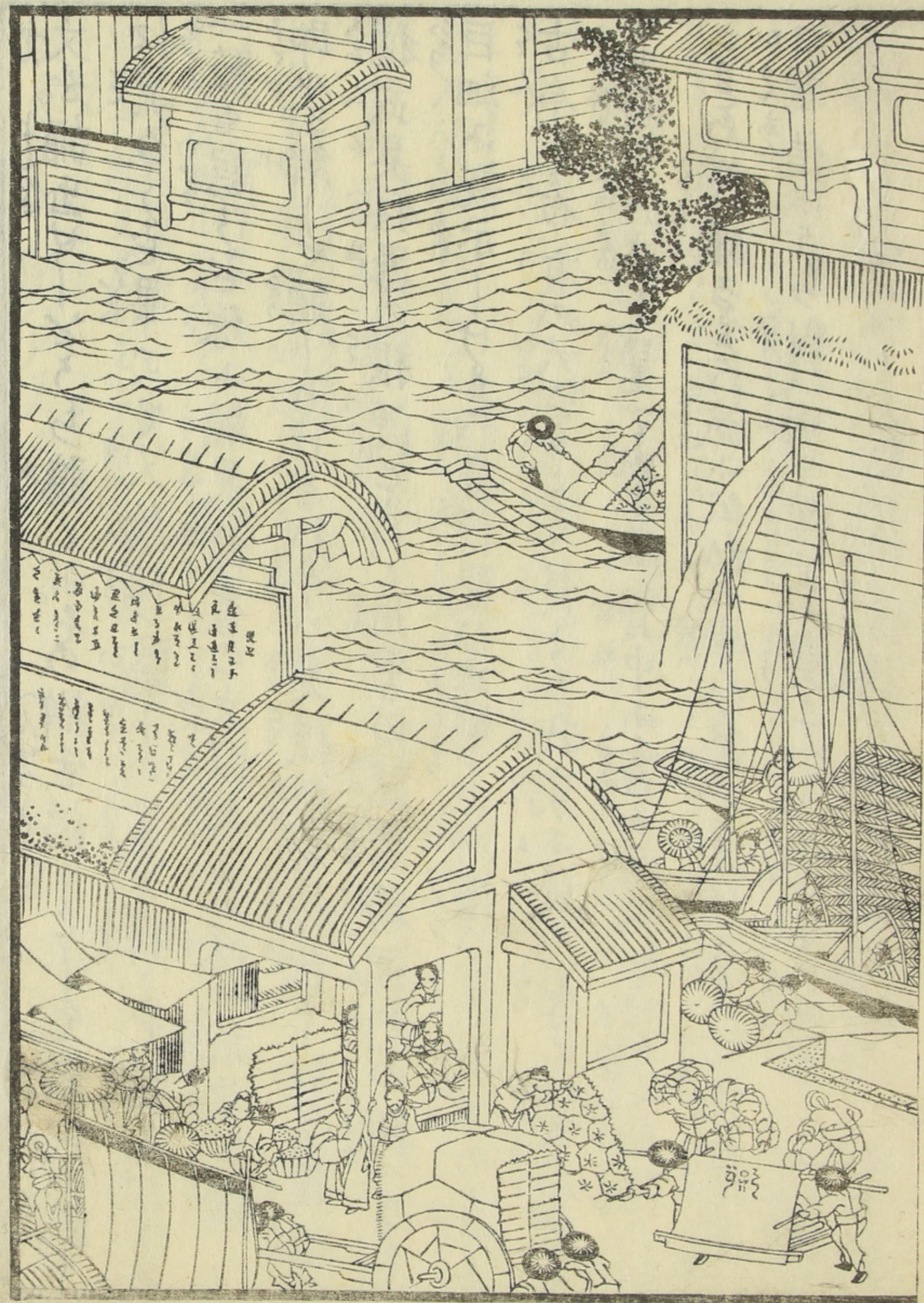
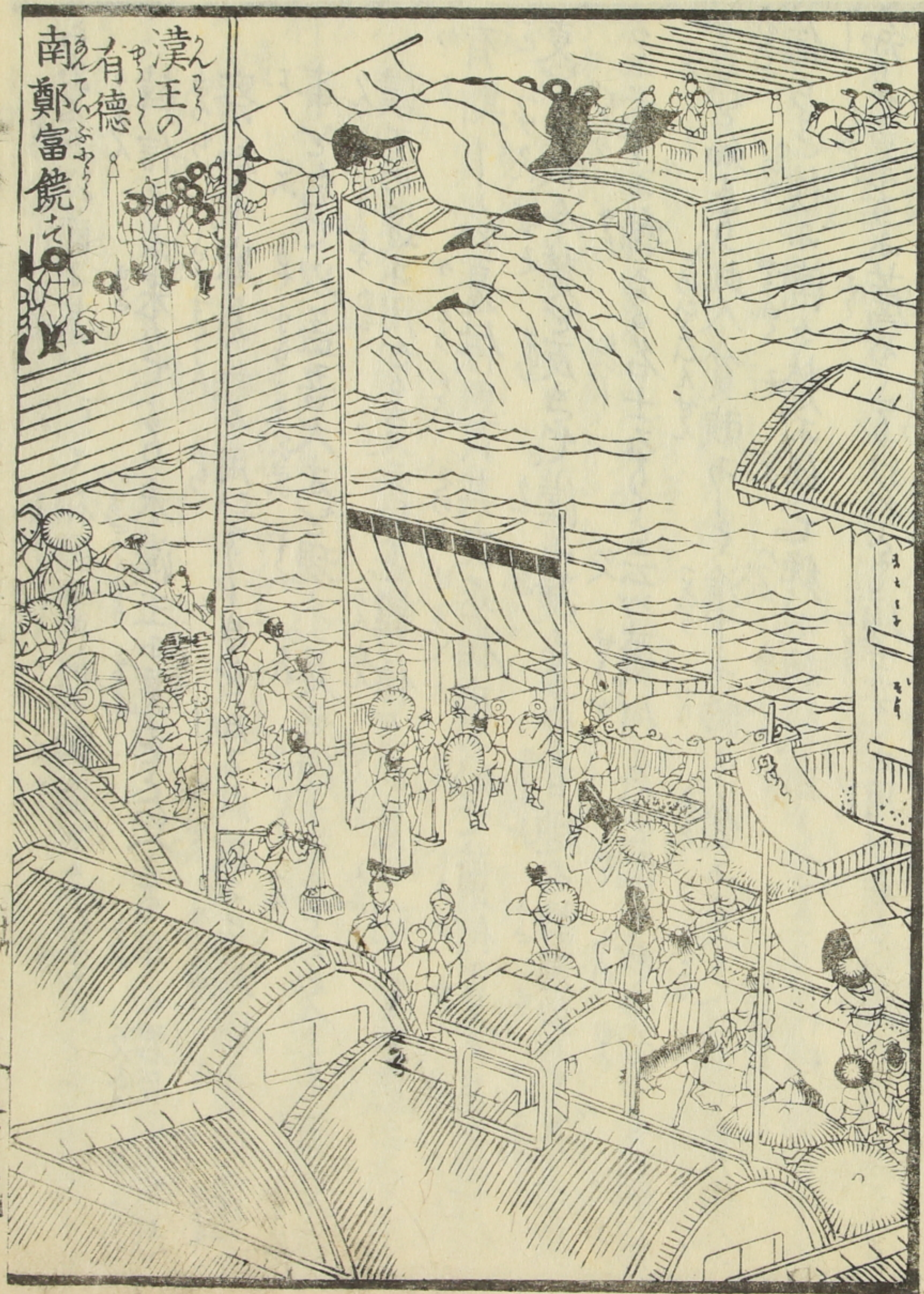
韓信が丞相府論蕭何

再說夏侯嬰の直言を和らげて先生必しも某の難し。辭成

怪めて心ある掛のひそ其故奈何とる。今論説悉く。漢家た為の大益ることも。項王の威勢強き夏天下の相對する者更ふ。唯我漢王の仁徳を以て民の心を得らる。これとも。未兵勢調諫せ。大小の武備る。楚の強軍の敵。難きを怖る。然るを榜を建て才能ある人を招き味方の雄威を輝さんと。既めて一ヶ條の能を保つ。士を稀る。貴客は是を小事として。敢て物の數とせしむ。此より其某が量らば。疑念を生ぜり。短才の所為なり。と。心を韓信にあらせ。則ち顔色を正う。て曰某千里を遠くとせ。虎狼群を險難の地を経て此土に來て。内実学と不修。あて唯徒に辯舌を誇り。空しく人を欺き。誰う是を免さんや。若某が言語と其行ふ所異なる。則恥を知る者あり。自外

を求むる。如右てい狂妄乱心ふ等。其何を罪を得るを。
好んとて勝公を軽んと。由るき偽を言さんや。漢の諸公は項王を。
恐る不及と云玉へども。其が眼を項王を視ると恰も小兒の如。
奈何を彼を強くと。其武勇古今ふ秀なりと賞する據所。
有るべきや。と云へ又夏侯嬰が曰実ふ云々所提るべ。余ら御。
邊の讀得らる。韜畧の道その能い何ふ韓信再答て曰夫大。
將の道の詩書を熟讀して能成敗を知て上天文より。下地理ふ。
至るまで。廣狹遠近のふ不及諸国一天下の人氣を察し。凡天地。
の間ある。大小事一つとして。某知るごとく。曉むとゆふ。其。
些ふ六韜三畧のふを知り。ふとて豈足るべや。然るるが。尊公の。
疑念を聊解べ。為ふ諸讀するを。すめんと。隨即その韜畧の。

文を誦出せ。とち聴く。その辯舌滔々として。懸河の流る。
に異る。と畢て又陰陽鑿トの書を擇て誦出る。ふ。
一點も誤る。と殊ふ韜畧諸書の文段。其意味の摘要を講ト。
即坐解して聴け。と。今ハ夏侯嬰も信伏しける。韓信ハ。
猶武具兵器の根源。と。と用ひるの法。要務便利の辨へる。と。
巨細ふ説示し。け。夏侯嬰ハ益教る。御邊ハ定ふ天下の奇士。
古今ふ希有の人なり。是より我家に留め。厚く食ふ。忘る。も。
亦静ふ其才を量で察る。胸中ふ畜る。所の智慧才能限り。知。
らる。博識る。と。誠ふ公私の幸ひる。と。夏侯嬰ハ悦み堪む。一。
日韓信ふ。うち對ひ明日漢王ハ奏をべ。余んふ必む。も。重く。
信用らる。と。と。父ハ韓信頭を振て。否。先漢王ハ相見べ。



らむ其以前ふ某と引て相国蕭何ふ對面と云ひ玉われとを推辭ける。
 韓信ふふ來りてより。未漢王ふ見むと云ふも早く君臣の器量と
 察知し。容易我を用ひしと云ふを知る。此故ふ先相国蕭何ふ見ん
 事と乞て以益吾大才と現し。是を漢王ふ告めんと。案ふ不違
 漢王の速ふ用ゆる某と韓信ふ前見の明るを感む。
 有斯く夏侯嬰其夜丞相府ふりて蕭何ふ見え見ふ韓信
 某と告彼今楚と反きて漢ふ歸するの旨趣を語て留めて其才を試
 る。天下ふ稀るる名士と云ふ蕭何これを聞て我も素より韓信
 が某と知まり。此人貧賤なり。淮下ふ釣し食ふさへし。市街ふ
 侮らむ。後ふ漸々楚ふ仕て。絶ふ執戟郎と云ふ。范增獨其才を
 知て累りふ薦めし。項王ふ用ひむと。豫て傳へし。

と某。此故ふ楚を棄て。吾漢家ふ投ずるらん。只恐る漢王も。
 彼兒が貧賤なり。と知りぬ。如何ふ薦め申し。とも重く用ひ
 玉ふ。と云ふ夏侯嬰の嘆息し。惜む。此人未時ふ遇む。今
 若これを重用らむ。必大なる功を立て。漢の天下と云ふも定むべき
 歟。在何ふ某が。明日伴ひ來るべければ。丞相自ら彼人の其大才を
 試みて。実学あるを知りぬ。一臂力以て君ふ奏し。奉て国家の大
 功を計らせぬ。と約言諾立歸す。夏侯嬰の次の日韓信を相
 伴て丞相府ふ到せし。一名内より出逆。韓信を倡引て堂上へ
 そ。扱はまめける。當下韓信の堂中を見廻せども。座席の設もろく。
 う。心中ふ喜む。折る蕭何出來りて。韓信ふ。對ひ昨夜夏
 侯嬰が某ふ深く御邊の才と稱し。告るを以て幸ひふ。今日見ゆる某

を得たり。と云ふ。韓信は不平。面色めて應るや。某林楚の在りて
傳へ聞く。漢王の聖明丞相の賢達る。夫將廣く士と愛し。賢人
を求む。渴するが如く。常ふ已と共ある。礼を敦く。有る故
千里を辞せ。此地の未だ數日を経て。彭越公の對面。今又丞相の
たれば。寂早故郷に立回。急に世俗の願いと脱して。身と山林の奥に
遁して。志を人の下屈せ。欲するものと云を聞て。蕭何の異
と。御邊の事。囊中の夏。吾君臣の現い。何とて速く旧里へ歸り
去んとい云る。と訊問れて。韓信は憚る。申す。夫賢人を求るや。
宜く礼を厚うして。逆へん。あえく。今丞相我を召ふ。聊も礼を
以てせ。某蓋囊錐を脱して。自ら薦むべきや。と。安て蕭何の心
を。韓信は屈し。憚る。又云。願くは賢士の高論を

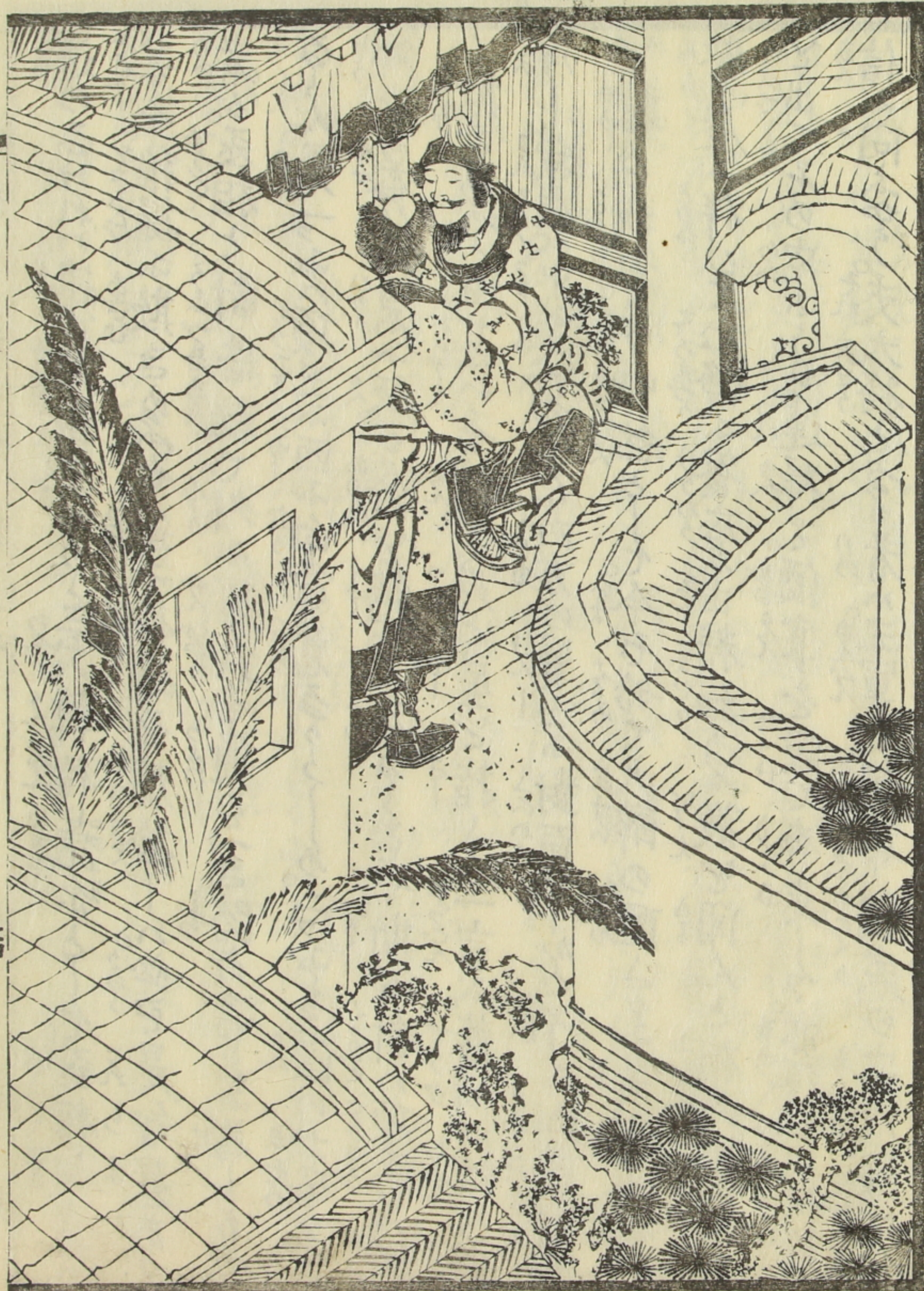
聞く。韓信はふ答る。昔。齊王を好む。時。一個の賢士あり。能
其業の妙を得る。齊王は之を聞傳へて。再三召け。賢士は漸々
齊國に到る。齊王は之を堂上坐せ。件の賢士は召昇。則て瑟を
鼓よとある。賢士の王の礼を見て。心裡に悦ぶ。不平の色を申
す。君瑟を好む。玉のどの。某が如き。賤れ。何ぞ君王の咫尺に見
え。と。得んや。既好せ。あま。尊卑の隔阻を許し。玉を。某も亦
藝事。依りて。召る。身。賤と恥む。王若実。瑟を好む。某
ふ鼓。あめんと。宜く香を焚て。礼を供へ。座席を改て。賜るべし。
然有ん。某も亦。必し。心を尽し。君の爲。瑟を鼓ん。今大王の某と召す。礼をせ。奴のど。賤し。某胡爲。遂
々と。身を賤め。か爲。召す。此地へ来らんや。と云。古の如。右瑟を

鼓のたふも尚礼せらるるを差況や丞相の今吐哺握髮の時中やと為君求賢国の大事を圖るべき道と聞んと欲する。座をも設けざる自ら傲で放りて士は遇ふは是則甘んずる。速く故郷へ歸て去んとする所以なり。と云きて蕭何の心付自ら立て韓信と上坐し請找せしめ再降して申ける。我暗くして賢を知る。故礼を失ふ。先生幸ひ海容して怪めらる。莫あると詫し。有穀ふ韓信も顔色を易く。曰丞相の賢と求め士を招きむは是実ふ国家の爲るべきや。某が来て目見るも心と傾けて国の神とる。是き吏と欲てあり。共一人の私事あらんと云ふ蕭何の益教ひ願ひて天下の形勢を論じ安危を決し。治乱を明めて審ふその強弱を説示し玉へと云ふ言ふ隨ひ

韓信の更ふ案ざる形容もる。揚々として応る。抑彼関中の百二の山河天府の国古より帝王の都を建るの地の利あり。介る項王の其上国の関中と舍て却る都を彭城へ移し。吏是天下の形勢を失ひ自ら亡と好む似たり。漢王の褒中へ左遷られ玉ふ等し。とくとも。脅力と養ひ威と蓄へて虎彪山の捷ぶの勢ひあり。智者とくとも。畧る吏を得ず。是天下の形勢を得る。項王向ふ所敵る。天下の諸侯とく。外面は一向強きを怕み。不従とく。者も内中より背叛の心と懷く。然り却て漢王の遠く褒中へ安居して裏より民の心を懷け。表より賢人を請招れ。且銳に兵を畜養ひ。ふふ不及復項王の江中へ義帝を弑し。大逆の名を得て。天下の爲ふ四言る。然れば荆襄の民湖南の人心悉く怨叛に

皆其罪と討んとせむ。彼せむる者るけれの不日して大乱を成人ふも猶項羽の知つて女自ら強きと恃む。是則匹夫の勇る。如何そ夫天下の心を服さるる又能んや。漢王の又足中る似也。先の國中へ入る玉ひ時法と三章の約し。秦の苛政を除き。今復中へ入る。素より天下の望ふ所なり。儻一旦兵を起して。東へ向ひ玉ふる。百姓諸民食く。うち連累して服し。拜せん宇宙の間一人として。漢王の國中の王と成玉んことを願ふものそいあり。章邯。董翳。司馬欣の三人の心をくむ。林楚の降す。却て二十万の隊兵と項王の爲の坑や。殺さむ。其恨を骨髓に入る。項王是と思慮もる。三秦王の封して。漢の兵と阻んとす。この誠敵國を資する。樞機の防禦と云つべし。如斯る。漢王の今も一鼓を起して。天下の人民

悉く。漢の兵と交む。三秦の一片の檄文を傳へて定め。是天下の形勢安危治乱強弱論る。吏を待ど。と知らる。丞相一毫の之憂ひ。及ば。と最輕易けを演る。蕭何情とうち。再応亦同て。曰果して御邊の言如く。今直兵と起して。楚を征伐可為や。否や。韓信答て。然。項王已他を殺して。諸侯の心離れ。百姓嗷々として。急。君と得ん。吏を欲し。三秦の合して。備。漢室の興起時。既。至。尙此節を失ひて。東へ向。古をせむ。齊。魏。趙。燕の中。智者あり。忽。不意。兵を發し。先。咸陽を責取。て。次。又。三秦を定め。其要害を緊く守ら。漢の兵。徒。縦。今年。老果るとも。夜中。と出る。吏能す。と云。蕭何の吐息して。云。所。理。る。と。如何。せん。棧道。悉く。焼。絶。て。漢の兵。急。速。に。押。出。る。べし。



韓信
褒中
入召
賢館
到

名臣
手令
題額

道のるければ、這ふ殆困里せり。と云へ韓信、荒郊とて丞相何とて
某を稚様ふ欺さるるを、適ふ棧道を焼捨へ、必は是智慧ある
者か丞相と計告諾て、外軍兵を通さべき路あるを、多ふ為し、
るん是、一少の項王、西に向ふの意あるを、二少の漢の士卒が故
郷を慕ひて東へ飯る。念と絶せん為るるを、斯る計の項王と、輒
く欺さるるを、某いふ信むべしと、星と指する一言ふ、蕭何の懐に再
洋し、我懷中へ入てより、四方の賢士は對面せり、かど了ふ如此高論
と聴く、我胃中快然とて、今を始て大醉の醒るるを、異るるを、卒や
弊屋ふ伴ひて心静ふ、餐食を由精細る、教と聞んと相共ふ丞相府
と出て、その宅より連綿て酒宴を設て奔走し、亦復蕭何韓
信ふ問ふや。夫大將とる者、ハ三軍の司命、國家の安危、唯一人の

身小倖りて、其任殊小甚重なり。願くハ大將とハ、道の道を聞ん韓信
の問ふ心とて曰、夫大將、ハ五才十過あり。五才ハ、智仁信、勇忠此五
才也。不可乱仁、能愛人、信ハ不失期、勇ハ不可犯、忠ハ不二心、是を
備へて、後ふと大將と称さるべし、亦十過ハ、勇ありて死を輕むる者、急
ありて心速る者、貪りて利を好む者、仁ありて殺さふ忍むる者、智
ありて怯むる者、信ありて妄ふ人を用ふる者、廉潔ありて人を愛せざる
者、計ありて心緩者、剛毅ありて自ら用ふる者、頼需俗の心、懶惰
端他任ふる者、此十過あれば、大將とさる者ハ不足故、ハ善兵を用
ふる者ハ五才と具十過と去て、而後將ハ任し、攻るハ破らむといふ
る。戦ふ勝むといふ更なる謀るハ成むといふ事なり、以て天下ハ敵
るべし。蕭何亦問て曰、當世の大將とる者ハ如何、韓信答て、今の

將たる者。或ハ高位ハ矜テ貪賤を惡シ或ハ性驕傲ヲ下國を
耻或ハ己ガ能ト揚テ他ノ善ト掩ヒ或ハ己ガ過を藏シ人ノ非を
彰シ是皆將たる者ノ敝ナリ。當今ハ凡々如斯トシハ蕭何又曰
御邊若大將トシテ三軍ト司スバ如何韓信これを聞テ云某大
將トシテあるハ夫只古法ハ反ク更ス。則兵を用ヨル文を以テ
之を存ス。武を以テ。此を守ル。靜を以テ。之を發ス。小動を以
テ。屯テ未兵の出ざる時ハ山岳の猶ク已メテ兵の出る時ハ江河
の像ク變化ス。天地の由ク。号令と出シ支雷霆の等ク。賞
罰を行フ。四時の若ク。策を運シ鬼神の似ク。亡ビテ能存ト。死
テ能生弱ク。能強ク。柔ク。能剛多ク。危ク。能安。機
變測るベク。勝事と千里の外までも決シ。天地内外の支連甚

と云斯ル。十萬の衆百萬のヲ。唯一人を仕ガ如クせん。或ハ晝夜
の事理を考。安險勝負の機を決シ。不窮の智を藏シ。奇正
相生ト。陰陽終始の分を明シ。然レテ後。仁を以テ之を容メ
礼を以テ之を立。勇を以テ之を裁シ。信を以テ之を成。此の如ク
する時ハ成湯の伊尹。武丁の傳說。渭水の子牙。燕山の樂毅。其好
の如ク押並シ。食トシテ我師ナリ。是則大將たるの道ナリ。其ガ
平日ハ養育所ナレバ。實ト以告申ス。必しも躬ラ誇テ。慢シ。多
思ハシ。ト云ハ蕭何ハ何トナリ。心裡ハ深く感シ。且奇ナリト
思テ憶メ。側ガレ。漢王ハ天の祐ル洪福あり。今斯の如ク英雄
の千里を數テ自ラ来テ。國家の大業を興シ。良策奇計を獻セ
んとハ。實ハ君臣の大幸。此上ナリ。ト喜ビ。堪ズ。其夜ハ韓信を家

不畱め厚く會訳し慰めて更白く随小寢床小入りしめ其身も
臥戸小入りけるが喜びの餘り眠るに能つた。情と性日の支えまでも
案る。彼張良が別る。即ち一片の割符を此身小与へて必ず破楚の
大元帥とる。べん人を尋求め薦め来さんと云つる。那韓信の其任
小実的中する者るれども。豫て約せし張良が割符のるを甚
麼歎せん左やせん右やとをり小思ひ難々寐しりし。韓信は不
割符を出さず我自己の才を顕し。重用せし。期小臨して張良
の割符を出し。古人の誓むと求る支の難ふを効なりと心小合
居しりける。蕭何は夫より韓信を由懇懇小持成々。数日の間家
小畱めて漢王小奏さば死事と夏侯嬰安めを談合ける。
漢楚軍談第二輯卷之二了

